およめさんのほしい雪だるま

ルードルフ=ウィーマー作
塩谷太郎訳

Wiemer, Rudolf Otto　　NDC 943
およめさんのほしい雪だるま
ルドルフ=ウィーマー著　塩谷太郎訳
新しい世界の童話シリーズ　176P　23cm
原題：KALLE SCHNEE MANN

1982年1月10日　初版発行©

定価 880円
検印廃止

訳　者　塩谷太郎
発行人　渡部ひろし
編集人　石井和夫
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
発行所　株式会社　学習研究社
東京都大田区上池台4-40-5 〒145
振替 東京8-142930

この本に関するお問合せ，製本上のミスなどがありましたら，下記あて文書または電話でお知らせください
東京都大田区上池台4－40－5　〒145
学研「お客さま相談センター」児童図書係
電話(03)720-1111

無断複写複製(コピー)を禁ず
Printed in Japan

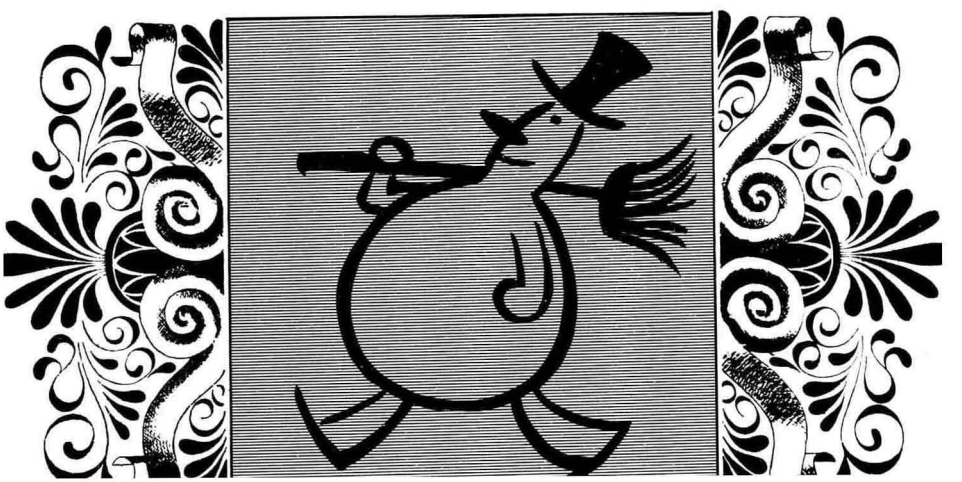
およめさんのほしい雪だるま

ルードルフ＝ウィーマー作

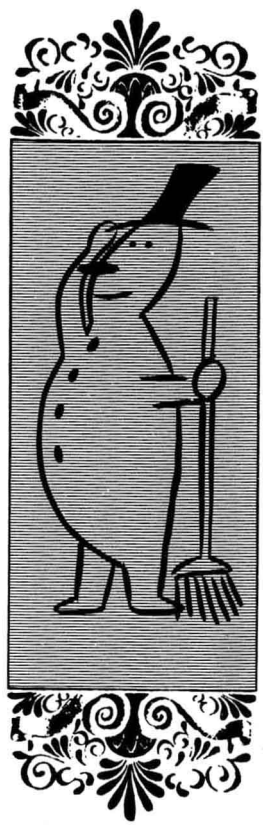
塩谷太郎訳

横山隆一画

KALLE SCHNEE MANN



Kalle Schnee Mann



およめさんのほしい雪だるま

5 ひとりぼっちの雪だるま

21 アイスクリームのおかわり

32 百科事典もだめ

52 なまやけのパン

68 サーカスへのりこむ

93 密猟者
105 戦争をふせぐ
124 太陽の忠告
134 さがしあてた女雪だるま
149 清掃車にのった平和の大恩人
158 ヤンからの電報

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

KALLE SCHNEE MANN
by Rudolf Otto Wiemer
Original German edition published
by J. F. Steinkopf Verlag, Stuttgart

●訳者のご紹介

1903年群馬県生まれ。東京外国語大学ドイツ語科をご卒業，現在は日本児童文芸家協会，日本児童文学者協会会員で，海外児童文学の翻訳・紹介につくされています。

主な訳書に『ハウフ童話全集』『リンゴの木の上のおばあさん』『小さいかいじゅう』『あかい鼻のおばけ』など，多数あります。

ひとりぼっちの雪だるま

家の前に、雪だるまが立っています。名まえはカッレです。目は炭、鼻は長い赤いニンジンでできています。カッレは、うれしそうにわらいました。寒さが日ましに、きびしくなってきたからです。

「ヤッホー、ぼくは、雪でできてるんだ。寒さなんか、へっちゃらだい。」

カッレはそういって、もういちどわらいました。

「そんなにわらうもんじゃないよ。みんながこまっているのに。」

スズメのマッツがいいました。マッツは寒さでふるえながら、かきねの上にとまっていました。

「ヤッホー、ぼくは、雪でできてるんだ。寒さなんか、へっちゃらだい。」

カッレは、またさけびました。

「おまち。あんただって、いまにきっとつらいことになるのよ。」
もう、畑にいっても、一まいのキャベツの葉っぱも見つけられない、めすウサギのリーケはいいました。
リーケは、長い耳をぴったりふせて、ウサギ小屋にとんでいきました。マッツは、納屋ののき下にもぐりこみました。
カッレは、ひとりぼっちになりました。それで、こうよびました。
「ヤン、ヤン、きこえるかい？」
ヤンというのは、この家の男の子です。ヤンは、まどをあけました。
「なにか用かい、カッレ？」
「でといでよ。」
「だめだよ。」
ヤンはいいました。
「ぼくに雪をぶつけてもいいんだよ。」

「ぼく、いまいそがしいんだ。」
「ぼくのシルクハットをかぶって、ほうきを空へほうりあげてもいいんだよ。」
「ぼく、しゅくだいをしなきゃならないんだよ。」
カッレはおこって、さけびました。
「そんなのないよ。ぼくはひとりぼっちなんだ。」
「そうだ、いいことがある。」
ヤンはいいました。
「いいことって？」
「およめさんをさがすんだよ。」
ヤンはわらいながらいって、ガチャンとまどをしめました。
カッレはひとり雪のなかに立って、考えていました。考える時間は、一日じゅう、たっぷりありました。
カッレは、はじめにこう考えました。

（ヤンは、ぼくをからかったんだ。）

それから、こう考えました。

（ヤンのいうとおりかもしれないぞ。ぼくは、雪だるまのおよめさんをさがせばいいんだ。そうすれば、もうひとりぼっちじゃないんだ。）

「マッツ、もうねたのかい？」

カッレは、スズメのマッツに声をかけました。

「ねちゃいないよ。はらがへって、ねむれないんだ。」

マッツはいいました。

「女の雪だるまのいるところをしらないかい？」

「しらないなあ。」

マッツはいって、頭を、またはねの下につっこんでしまいました。

「リーケ、もうねたのかい？」

カッレは、こんどは、めすウサギのリーケに声をかけました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なにか用？」
めすウサギは、ウサギ小屋のなかからいいました。
「女の雪だるまのいるところをしらないかい、リーケ？」
「女の雪だるま？　きいたことがないわ。」
「女の雪だるまがほしいんだよ。ぼく、ひとりでいたくないんだ。」
カッレはいいました。
「なぜなの？」
リーケはききました。
カッレは、ためいきをつきました。
「ひとりぼっちで、さびしいんだよ。」
リーケは、前歯をなめました。
「いったでしょ。あんたも、いまにつらいことになるって。」
「おしえてくれよ、リーケ。ぼく、どうすればいいんだろう？」

「さがすのよ。」
「さがす？」
「そうよ、見つかるまでさがすのよ。四本の足で。」
「ぼくには二本の足しかないよ。おまけにこの足は、うごかないんだ。」
「とぶのさ。」
スズメのマッツはいいました。
「ぼく、はねなんかないもの。」
カッレはそういって、足をうごかそうとしましたが、だめでした。
「歩くには、れんしゅうしなくちゃ。」
リーケはいいました。
カッレは、足をうごかしてみました。いたみがつーんと走りましたが、どうにか、左足をうごかすことができました。
カッレは二本の足を、前にやったり、うしろにやったりしました。

「そら、うごくじゃないの。」

リーケはいいました。

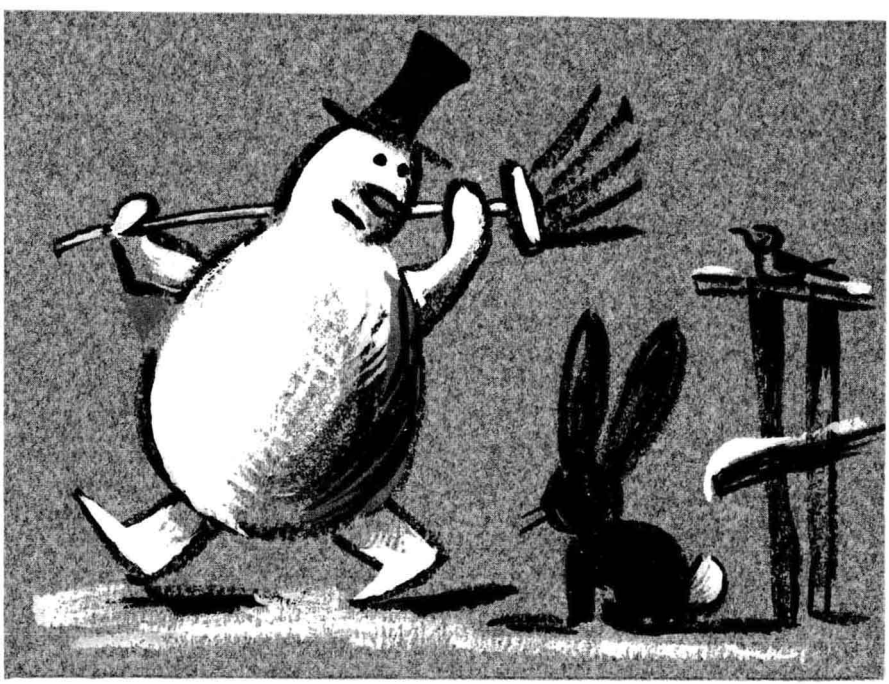
カッレはうれしそうに、ひと足ふみだして、ほうきのえをにぎり、「じゃあ。」といって、でかけていきました。

スズメのマッツとウサギのリーケは、カッレを見おくっていました。

「女の雪だるまだなんて、とても信じられないなあ。」

マッツはつぶやきました。

カッレは山をいくつものぼったり、おりたりしました。空がだんだん明るくなってきました。これなら、女の雪だるま



をさがすのもらくだぞと、思いました。まっ白い野原があり、まっ白い森があって、森のなかに、なにか赤いものがいました。

「やあ、こんにちは、きみはだれだい？」

赤いものは、カッレに声をかけました。

「ぼくは雪だるまのカッレだけど、きみは？」

「おれをしらないのか？　へんだなあ、だれでもしってるのに。おれは、キツネのライネケ＝シェールだよ。」

「こんにちは。」

カッレはそういって、ぼうしをとりました。れいぎただしくしなければいけないと思ったからです。

「寒くないかい？　なにかたべるものをもっていないか？」

キツネはいいました。

「なんにもなかったなあ。」

カッレは、またぼうしをかぶりました。
「どこへいくんだね？」
「女の雪だるまをさがしにいくんだよ。」
「なんのために？」
「ひとりでいたくないからさ。」
「そうか。じゃ、雪だるまの子どももほしいんだろう、ええ？」
「子どものことまでは考えなかったけど。」
カッレは、とまどってこたえました。
キツネは、そばへよってきました。
「手つだってやろうか？」
「ありがとう。女の雪だるまのいどころをしっているんだね。」
カッレはよろこびました。
「まあな。ちょっと耳をかしてごらん。」

「さあ、どうぞ。」

キツネは、うしろ足で立ちあがると、そっといいました。

「女の雪だるまは、おろか村にいるんだよ。」

「おろか村って、どこにあるの？」

「あっちさ。」

カッレは、くびをまわしました。とたんに、キツネはカッレの鼻にかみつきました。赤いニンジンの鼻がなくなって、どろぼうギツネもいなくなってしまいました。

カッレは、かなしそうに雪の上にすわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com